

〔表1…争う要素のある祭り〕

No	県名	地名	実施場所	行事名	実施日	時間帯	争う方法	得られるもの	争う人々	行事内容
1	青森県	南津軽郡尾上町	猿賀神社	柳の神事	旧暦1月7日		小枝を奪い合う	お守りになる	参詣者	「柳がらみ」とも言う。猿賀神社の氏子の三上氏が柳の大枝を振り上げ、床の盤に打ち付ける。これを12回繰り返すが、閏月のある年は13回行う。打ち付けられた柳の小枝の折れ具合によって稲作の豊凶を判断する。早く折れ落ちると豊作、遅いと凶作だと言われる。落ちた小枝は、参集した人々がお守りになるというので争って拾いあう。
2	秋田県	平鹿郡大森町八沢木地区	保呂羽山波宇志別神社	御戸開神事	正月4日		悪口を言い合う		参詣者	四日の日峰に登る人々うちむれ路もさりあへず、わる口、大口利くをここにて悪態といふ。それをわれ劣らじと口々に云ひ罵りける事は、都の祇園の削掛、尾張の天道祭、江刺郡の妙見祭などのごとく、親子居ならびてうち聞く事あたはぬ事のみばかり、ただおそくつのものがたり書などをこはだかに語りもて行がごとし。
3	岩手県	岩手郡岩手町川口村大金沢地区	サヤド	ウブスの祭日	4月3日と12月3日		喧嘩をする	喧嘩に負けると作が悪い、喧嘩がなくて作が悪い	部落の人々	大金沢の産土神は比岐々明神で、鎧の明神といい、作神さまである。戦の神だというので戦前は盛んに他所から参詣に来たものだが、戦後は部落の者が参るだけである。祭祀は4月3日と12月3日で、以前はこの日に部落の者が籠ってオミキアゲをしたが、今は別当だけである。(中略)神楽の宿をサヤドといい、以前は新築の家がサヤドを勤めたが、今は順番である。戦神なので、祭りには喧嘩があり、喧嘩に負けると作が悪く、また喧嘩がなくなると作が悪いといったものである。
4	岩手県	東磐井郡千厩村	愛宕神社	御鳩取り	8月中旬不定期		オハトを取り合う	賞がある		八月中の不定日に行われる。白木の神輿の上に木彫りの鳳凰をのせてオハトと言い、群衆の間に投げ出して夜を徹して争い拾う。取り勝った者に賞がある。
5	栃木県	足利市大岩町2番地	最勝寺	悪口祭	12月31日大晦日	夜中	悪口を言い合う	その年の幸福	参詣者	知ると知らぬとの別なく顔を見次第にお互いに悪口し合い罵倒しあう。然るもその文句は極めて野卑であり醜態であって、ほとんど上顎と下顎のぶつかり放題に浴びせかける、とても平常なれば唇頭に上らすことの出来ぬほどの誹謗の文句を、平然として——しかも相手に負けまいとさかんに連発する。(中略)ただ此の毘沙門堂の悪口祭には禁句の定めがあつて、泥坊、姦夫(間男)、癪病の三つだけは言ってはならぬ事になつていて、若し過つて此の3つのうち1つでも云えば、その者は負けとなるのだと聞いている。そしてこの悪口祭に言い勝った者は、その年は幸福だといわれている。

8	7	6
神奈川県	茨城県	栃木県
相模原市田名	西茨城郡岩間町	
田名八幡宮	愛宕神社	
田名八幡宮的祭	悪態祭	(悪たい町)
1月6日	旧暦11月14日	
午後1時	夜(戦)後か昼間)	夜中
的の材料を奪う	悪口を言い合	悪口を言い合
養蚕が当てる、農作物の出来がよい	幸福	厄除け祈願
参詣者	参詣者	参詣者
「悪口祭」の奇祭で知られる大岩山多門院最勝寺は通称「大岩の毘沙門さま」として知られ、ユニークな行事が伝承されるお寺です。大晦日の夜に交わす挨拶はなんと『バカヤロー』。「悪たい町」とも言う、大祭は前夜から大岩地内で行うもので夜九時ごろになると所々に「馬鹿野郎」の声が聞こえるようになります。そして毘沙門天にむかって山に登るのですが、途中人に出会うと「馬鹿野郎」と声をかけます。声をかけられた人も「馬鹿野郎」と言い返します。このように人と人が出会ったときに普段の挨拶のようにお互いが「馬鹿野郎」というのです。また、商人が店を出している「馬鹿野郎これは何ほどか」と問いかけるし、商人もこれに答えて「馬鹿野郎これを買うのか」と言う。なお、「悪たい町」はこの時に「ボー」の付く言葉を使うと言った人の負けになります。(例えば、「のらボー野郎」、「どろボー野郎」など) このように、「悪たい町」は商人ならびに人々が何と言われても怒らないので、我慢をしなければならないという「忍耐祭」でもあるのです。「悪口」を吐いて厄除け祈願。いつの世にも人の心に潜む邪心はいっ鎌首をもたげてくるか分かりません。何と言われても腹を立てずに我慢をする。堪忍袋をしつかと締めておく我慢比べといった所でしょうか。当山では悪口祭り提灯行列として、山頂まで行列を組んで天に向かい悪口を吐く「悪口祭ちようちん行列」を行っております。 旧暦11月14日の夜(戦後から昼間)に、13人の天狗の化身が愛宕山の参道を登り、途中の祠に神饌を供え、頂上の飯綱神社で神主が祈禱をあげる、と言う祭り、この参道を登る時と祈禱の間に参詣者がお互い同士で悪態をつくが、その内容に対して怒ってはいけなさとされている。その内容は、「この馬鹿」「天狗のバカヤロー」「このおたんこなす」などで、参詣者同士だけではなく天狗に向かっても悪口を言っており、時折笑い声も混じっている。天狗に向かって悪態をつく事は禁止されていないが、天狗は一切言葉を持たず、供物を奪おうとする人を手にした竹で叩くだけである。このとき、悪口に言い勝つ、あるいは供物を奪う事で幸福が得られるとされている。 当初、「天地大明神」(境内社)の祭礼であったが、現在は八幡宮の祭礼となり、旧田名村の11地区の輪番で射手を担当して行っている。1月6日午後1時、当番地区より選ばれて射手を勤める4		

10	9	
愛知県	神奈川県	
豊川市 1番地	小田原市	
豊川稲荷 (妙厳寺)	白鬚神社	
喧嘩参籠	白鬚神社奉射祭	
12月31日 大晦日	1月7日	
夜中		
悪口を 言い合 う	燕を奪 い合う	
豊作	魔除けにな る	い、家畜が 良く育つ
豊川稲 荷を信 仰する 人々	見物の 人	

名の子供と介添えの父親、総代氏子代表の着座によって始まる。神前で祝詞を奏上し、神酒を頂き「くじ」を引いて順番を決め、一番二番に弓一張ずつ、三番、四番に矢一本ずつ授かった後、参列者全員で行列を組み天地大明神に参拝して社殿を左回りに三巡し、的場に移動して奉射にうつる。総代代表の合図によって、天下、地頭、住民のものとされる三本の矢を、一番手から四番手まで、合わせて12回の奉射を行い、的中した矢の数によって総代代表が豊凶の占いをして終了する。的に使われた「鉤」や「よし」を持ち帰ると、養蚕が当たり、農作物の実りも良く、家畜も良く育つと伝えられていた事からこの奪い合いは猛烈を極め、特に「鉤」の取り合いは誠に勇壮なものであったが、現在は行われていない。

当日、神前に初穂・弓・矢・燕・的を供えて宮司の祝詞奏上の後、射手である小宮家の本家・分家の二氏がお払いを受け、境内の東側に西面して的中の中間に散米所をもうける。社殿において宮司の撃つ大太鼓を合図に本家の射手が三本の矢を用意して射場に立ち、分家の射手が散米を撒くと同時に第一矢が放たれる。続いて第二矢・第三矢を放ち、矢が的に当たると見物の人々から「大当たり（豊年の意味）」と言う歓声と拍手が起こる。ここで射手が交代して分家の射手が射場に立ち、本家の射手が散米を撒くのを合図に第四・五・六矢が放たれる。的にあたった時の状況は、本家の時と同様である。再び射手が交代して、本家の射手が第七矢（最後の矢）を放つ。この最後の矢が放たれると、見物の人々がどつと的に飛び込んで的につけてある燕を奪い合う。かつては怪我人が出たり、喧嘩の奪い合いが見られたが、現在は比較的大人しい状態である。この燕を自宅に持ち帰り、玄関に下げておくと魔除けになるといわれている。

豊臣秀吉が朝鮮出兵をしたころ、三河地方に風水害があり、豊川稲荷を信仰していた三河宝飯郡、遠江磐田郡の村民に大晦日に参籠せよとの霊夢があったので、両地村民が参籠して悪口を言い悪魔退散を願った所豊作になったというのがこの行事の由来とされる。参籠堂内に詰め掛けた群衆が、大声で「貴様は借金取りに追われてここへ逃げてきたのだろ」とか「今頃貴様の家は丸焼けだ」とか、悪態の限りを尽くすが、絶対に手出しはしない。午前二時半、暁の鐘が鳴ると、一同「おめでと」を連発し、開運を祈

11	愛知県	北設楽郡東栄町	尾張大國 靈神社 (国府宮)	12	愛知県	稲沢市	13	岐阜県	岐阜市	14	岐阜県	岐阜市	美江寺
花祭り	御園地	足込地区	難負神事	厄が落ちる	悪口を言う	夕方	11月第2土曜 ・日曜 など	旧正月 13日	午後から 夕方	神男に 早く触れる	厄が落ちる	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など
夕方	11月第2土曜 ・日曜 など	旧正月 13日	午後から 夕方	神男に 早く触れる	厄が落ちる	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など
山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など
山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など	山車、人形、餅、笹、など

20	19	18	17	16	15
福井県	新潟県	滋賀県	滋賀県	滋賀県	岐阜県
三方郡	南魚沼市 大和町 浦佐町	蒲生郡 日野町 中山	志賀町 八屋戸	大津市 真野町 (関市)	武儀郡 倉地村 (現・ 関市)
臥竜院	毘沙門堂	野上山	八所神社	神田神社	白山神社
ハタト	毘沙門の祭	芋比べ祭り	八所神社 社安産大祭	神田神社 社稚児祭	喧嘩祭
盆の8	正月(旧)2月3日	新9月1日	10月9日	5月5日	新暦4月20日
		昼間	午後	午後	
施餓鬼	金銀の杯を奪い合う	芋の長さ比べ 西谷が勝てば豊作、東谷が勝てば不作	餅を取り合う 子授け・安産	駒が暴れる 豊作になる	神輿に先に乗る 田植えの水を引く権利を得る
臥竜院	氏子	中山の人々	参詣者	町の人々	地区の人々
ぎは最早昔語りである。 四月二十日に行われ、上下二組に分かれた競争があり、神輿の上に先に乗ったほうが勝ちだといって互いに押し合いを行うのであるが、勝ったほうが先に田植えの水を引く権利を得ると言う。 あばれ祭りとも呼ばれる。祭りの主役は紋付姿の二人の稚児と、駒と呼ばれる六人の少年達である。駒は冠に袴姿の十二、三の少年で、手には竹の笥(むち)を持つ。神社での祭典終了後、神輿と呼ばれる長さ2mの櫓を「ワツシヨイ、ワツシヨイ」と掛け声をかけながら、神社横の馬場に設けられた御供所に運ぶ。御供所に着くと、駒たちは御供台においてある供物を石垣や地面にたたきつけてあばれまわる。大人たちがそれらを拾って供物台にのせると、駒たちは手にした笥で供物台を何度も叩き、いつそう激しくあばれまわる。駒が暴れば暴れるほど、その年は豊作であると言われる。 八所神社で10月3日に行われる秋祭り。秋祭りであるが、古来安産の神として信仰が深いため、近郷では安産大祭と呼んでいる。当日、氏子中より他の神饌と共に小餅が一盛りずつ供えられる。この祭典に氏子の妊婦はもちろん、近郷また遠方より既婚夫人やその親が参拝する。祭典終了後、この供えられた小餅を氏子総代らが拝殿より餅まきするので、これを競って拾い、子授け・安産の御供として、家で食する。 中山は西谷・東谷に分かれており、東西それぞれで取れた通称「唐の芋」と呼ばれる芋の、根元からは咲きなどの長さを比べあう祭儀である。(中略)いよいよ芋を出し、長さを測ることになる。この時のものさしは、櫓の木の丸太を八寸の長さに切り、二つに割り東西で持ち帰った「常尺」と呼ぶものを用いる。計測の折、常尺をあてた回数だけ「神の踊り」と称する踊りが行われる。勝負の結果、西谷が勝てば豊作、東谷が勝てば不作と伝えられており、以前は水利権までも勝ったほうの村が優先したとも伝えられている。 押し合いが激しければ激しいほど毘沙門様が喜ばれると言って、堂内で「サンヨウ」「オウサイ」と言って押し合い、投げられる金銀の杯を奪い合うというのである。 施餓鬼をしてからハタトリの行事があるが、昔はその順番を尊び、					

23	奈良県	22	石川県	21	福井県	
高田	桜井市	泉郷	加賀市	井野	三方町	三方町
	飯宮	山代温	葉王院温	村の田	旧西田	旧西田
		泉寺			村神子	村神子
亥の子	あばれ	祭り	菖蒲湯	初詣?		リ
曜第1日	新12月	日(内4)	6月3日	大晦日		月15日
	夕方			夜中		
れるう、暴	農具を	菖蒲を	注連縄	壮健で過ご	う取り合	で用い
	豊年になる	福運がある	せる			
子(男)	生以下	衆々、観	温泉郷	性の男	村の青	周辺の青
競争であった。フキヌキといって竹に縄をくくり、紙で作った旗をつくる。この旗は送り施餓鬼に用いたが、三方の青年が臥竜院でこれを振り回すのを、村々からやってきた青年が取り合いを演じ、羽織を破いたりしてけんかも起こる始末で大変な行事だった。旗を取ると、持ち帰った。 村人(男)が由比神社の鳥居にはつてある注連縄をとりに行く。それを早く取った人がその年は壮健で順調に過ごすことができる。行っていたが早さを争うようになり、それ以前に行きようになつてしまった。 二日目の6月4日午前、葉王院保育園児の「鯉のぼりみこし」ひきが湯の曲輪でワツシヨイ、ワツシヨイの掛け声も勇ましく練る。午後、小額高学年の御輿と商店御輿が続き温泉街を練り、太鼓の音に祭り気分が盛り上がる。四日の夜、勇壮な菖蒲御輿が担がれる。温泉寺では、京都狸谷からの招いた山伏の厄除け加持祈祷がある。御輿は菖蒲を八俵に詰め込み積み上げ、それに清水をかけるのを合図に若い衆十人あまりが担ぐ。赤白半々の法被と股引、赤の鉢巻に白足袋の装束、曳き綱の百人も同様。高張提灯の先導、その辺りから菖蒲の香りが漂ってくる。菖蒲御輿は威勢よくワツシヨイワツシヨイの掛け声と共に総湯を中心に曲輪を十週しあばれて練る。御輿の俵は路に放り出され、ひっくり返され、香気が漂い、しまいには俵はくたくたになり縄は切れ菖蒲が散乱するほどになる。このとき、菖蒲を奪い合い、掴んで総湯になだれ込む。観衆はざつと二万人、関西、北陸からの観光浴客である。菖蒲を奪い合い、先駆けて湯に投げ込むと福運があるという。 「亥の子の暴れ祭」とも言う。本来、旧11月1日であったが、12月1日になり、12月第一日曜になった。山口神社には社殿はなく、祭りは近くの集荷場で行う。(中略)祭前の日曜には前年の当家を含めた六人がねむの木で唐鋤、馬鋤、鎌、鋤、鉈、横槌などのミニチュア農具を数十個作成する。祭当日の朝、六軒の当家は集荷場に集まり、餅を作る。午後から集荷場の前に飯宮を作る。これは割り竹を用いた高さ六尺、一辺六、七尺大の四角く組んだ簡単な枠で、出来上がると先に作った農耕具や包み銭を吊り下げる。小学生以下の男子が集まり、午後4時から祭典が始まる。御分霊が納まるお飯屋が当家から運ばれて飯宮の上に安置され、餅一組						

25		24	
奈良県		奈良県	
御所市 古瀬		桜井市 三輪	
川合八幡 神社		恵比寿神 社	
引合餅 行事		初えび すの 「ごく まき」	
10月9日		新2月 6日	
夜8時 過ぎ		午後 2時	
コグツ が引き 回され ている 餅を取 るに なる		撒かれ る供物 を奪い 合う	
妊婦が食 べ			
氏子		参詣者	
と唐鋤、馬鋤が供えられる。区長が祭主となり、神に感謝する言葉 を述べた後、仮屋と供物が撤下され、仮宮壊しが始まる。当家の 合図で子供たちは仮宮に吊り下げられた農道具を取り合い、最 後には仮宮を倒して潰してしまう。続いて直会にうつる。出席し た子供の数だけ膳が組まれる。本膳は三本の大はし・竹はし・大 小の餅の他、豆、大根、ひじき、里芋を各々小皿に盛ったもので ある。男子は最大の餅を逆さにして三本の大はしを三脚状に突き刺 して立てて、その上に小の餅を置く。この間に、当家は膳に味噌 汁をつけて回る。準備が整い、当家の合図が出ると、子供たちは まず餅をしっかりと抱えたあと、膳を蹴飛ばしたり踏みつけて暴れ まわるため、あたり一面に汁や惣菜が散乱する。この暴れ方がひ どいほど、神様が喜ばれ、豊年になるといわれている。 恵比寿神社で、2月6日を中心に前後三日間行われる祭。初市祭 とも称し、古くは旧暦の正月6日に行われていた。（中略）まず2 月5日は宵えびすで午後二時半から鯛引き行列が行われる。これ は恵比寿大神が好んで鯛釣りをされたという伝承に基づき、二百 名近い子供たちが町内を練り歩き、神前に奉納するのである。午 後4時からは初市相場奉告祭が行われるが、現在は地元の有産 業である三輪素麺のみ初相場が立てられる。6日当日は、午前十 時より初市大祭が斎行される。初えびす奉賛会や恵比寿講議員多 数参列のもと、商売繁盛、福德円満を祈る大祭が営まれ、多くの 参詣者でにぎわう。社頭では、「福娘」より吉兆・福田藁・福熊手 が授与される。翌七日は後宴で、お湯の神事と「ごくまき」がお こなわれる。午後8時、本殿正面に置かれた八つの湯釜で湯立神楽 が行われ、巫女は釜の湯を笹束で参拝者に振り掛ける。この湯は、 無病息災の靈験あるものとして、貰い受けるものが多い。午後4 時、初えびす最後の行事として「ごくまき」が行われる。紅白八 斗の小餅を始め、神前に供えられた果物なども社頭の特設舞台か ら盛大に撒かれ、参拝者は競ってこれを奪い合う。 祭りに先立って餅つきをし、前日には引合餅に使うコグツとい う入れ物を作る。中には小判型の一合餅を80個詰める。九日午後、 学校が引けてから地車も出て町内はにぎわうが、これにコグツが 積み重ねられている。夜八時過ぎ、地車と共に高張提灯と十二張りのス スキ提灯が各地区から境内に入ってくる。高張提灯は本殿前に、 地車と共にススキ提灯は境内所定の位置に立てる。本殿前で祭典			

28	27	26	
京都府	京都府	和歌山県	
	京都市東山区 祇園町北側 2番5地	有田郡	
	八坂神社		
	おけら参り	笛踊り	
	12月31日 大晦日	正月	
夜中	夜中		
悪口を 言い合 う	悪態を つく	悪口を 言い合 う	りし、 出奪 い合
	迎年の吉兆	秋のコナシ が良い	
参詣者	参詣者		
が行われた後行事に移る。神前に供えてあったコグツを鍵元が担ぎ上げて、約6㍴の石段から転げ落とす。下では若者が待ち構え、石段を登っては下へ落とす。これを各地区から順に一人ずつ行う。落とした後、コグツに松明で小さい穴を開け、巻きつけてあった綱を伸ばして大人の扇動で子供たちが境内を何週も引き回してから小餅を取り出して子供たちに分配する。最後に供えてあった御供餅がまかれ、大いににぎわう。また以前は、コグツには一戸五合取りの餅が16個入れられ、引き回されるコグツに氏子がわれ先に辻を入れ、餅を取り出そうと奪い合いになったが、取り出しても頭上に掲げないと自分のものとは成らず、壮絶な競いが繰り広げられ、全部出すのに夜中までかかったこともあったという。この餅は妊婦が食べると安産ですむといわれ、希望者が多かった。 正月に行われる笛踊りにも悪口を言い合う。この様をコナスというが、コナスと秋のコナシ（実り）がよいと言う。しかし、盗みをするこゝただけは禁物となっている。 毎歳除夜子の刻より社参の緒人雑言を恣にし他人を誹謗す、仮令其声を聞其人を知るといへともこれを争ず是を恨ず、邪義の祓にして勸善懲惡の意ならんか、その雑言に勝たる方、迎年の吉兆なりとし、又参詣下向の道条にても放言するを世俗諺て是を削掛といふ。 又都の祇園殿に、大年の夜けづりかけの神事とて、緒人詣でける。神前のとし火くらふしてたがひに人兒の見えぬとき、参りの老若男女左右にたちわかれ、悪口のさまさま云うがちに、それぞれはわらへる事也。「おのれはな、三ヶ日の内に餅が喉につまって、鳥辺野へ葬礼するわいやい」、「おどれは又、人売の請でな、同罪に栗田口へ馬に乗って行くわいやい」、「おのれが女房はな、元日に気がちがふて、子を井戸へはめおるぞ」、「おのれはな、火の車で連れに来てな、鬼のここのものになりるわい」、「おのれが父は町の番太をしたやつじゃ」、「おのれがかかあは寺の大黒のはてじゃ」、「おのれが弟はな、銜云の挟箱もちじゃ」、「おのれが伯母は、子おろしやをしるわい」、「おのれが姉は襦袢に味噌買に行て、道で転びるわいやい」。いづれ口がましう、何やかや取ま			

33	32	31	30	29
兵庫県	兵庫県	大阪府	大阪府	大阪府
洲本市 由良	西宮市 社家町	池田市 伏尾		大東市 野崎
由良湊神社	西宮神社	細川神社		野崎観音 (慈眼寺)
ねり子 祭り	十日え びす	秋祭り	野崎参 り	野崎参
2月10日 、11日	1月10日 (本) えびす	10月23日 (現)		5月1日 から
昼間	朝の6時 開門		昼間	昼間
一番鈴を 鳴らす	本殿に 早く到 着する	最初に 宮入を する	悪口を 言い合 う	言葉争 いをす る
縁起が良い	福男に 選ば		運が良い	
氏子、 時には 一族	参詣の 男性	伏尾地 区の人々	参詣者	参詣者
春は無縁経とて桜花匂ふ頃、秋は紅葉して山々錦なるふし、難波津の老少、ここに群じ、あるは川舟に棹さして道ゆく人と言葉戦ひして、詣する輩多し。これを野崎参と云 「なんぼ口で言い合いても、手エひとつかけんというのが名物や。ええか、ここであらう、口で言い合ひするやろ。船が住道へ着くわ。そしたら、先ほどは失礼をばいしました、これから仲良うお参りいたしまひよか、さ、おいなはれや、ちやかちゃんちゃん……と踊りながら行くのや。行く道だけのけんかや。このけんかに言い勝ちさえしたら、この年は運がええいうねん。運さだめのけんかや」「おい、向こうからくる男、頭がしがし掻いてるやろ。あれかゆいことあれへんねん。袖口から赤い襦袢がちらちら出て、あれを見せたいのや。あいつ捕まえて言うたれ、そない見せたい襦袢なら、ぬいで竹の先に結び付けて、わてこんなん持つてます、ちゅうて野崎さんまで振つて歩け、とこない言うたれ」「よし、ほな言うたろ。おい、そこ行く奴。それほど見せたい襦袢なら、竹の先へくくりつけて、せいぜい我慢して歩け」「おい船の中のん、襦袢はあるが因果で着てるのじや。お前もあるのや。つたら着てきたらどうや」「わて、ないわ」「そんなこと言うたら負けや。持つてる言わんかい」「持つてるぞ」「持つてたら何で着いへんのや」「質に置いた」「よけいかんがな……」(後略) 戦前までは、かつぎ太鼓が出て細川神社の前に集まり、宮入を競う喧嘩太鼓と呼ばれていた。かつぎ太鼓と演奏者4人、控えの演奏者4人を乗せてかつぎ人数がなくなり、現在の夏祭りに吸収された。 一月十日の午前六時になりますと、表大門を開ける開門の神事があり、今や遅しと待ち受けていた人々が一斉に境内に走りこみ、そのうち一番参りの人が福男に選ばれますが、この十日えびす独特の習慣も、忌み籠りが厳修されていた時代からの名残です。 走るのは、由良湊神社から若宮神社までの700～800mの間で、父親を中心にその近親や友人たち5～10人が付き添い縦走する。子供を抱え、子供が泣こうが逆さになろうが構わないで走り途中息切れがする親に変わって、一族がわが子をリレーすることもある。一番鈴を振ると縁起が良いといわれ、担いだ幼児をまるでリレーのバトンさながらに受け渡す、ふうふうと全力で走り抜けるグル				

36	35	34
兵庫県	兵庫県	兵庫県
相生市	美方郡 浜坂町 久谷	明石氏 大蔵天 神町
相生湾	ナカミチ と呼ばれ る久谷川 と瀬間谷 川に挟ま れた公道	休天神社
ペーロ祭	菖蒲の 綱引き	湯立て
5月最終 土日	旧5月 5日（現 在は6月 5日）	3月25 日
昼間		午後 3時
船競、 漕、御 幣奪い	綱引を する	湯をま くのに 使った 笹を奪 い合う
名誉	豊作	悪事、 災難
3隻の 船（船 競漕）、 見物客 （御幣）	子供集 団と大 人組	参詣者
午後三時、四方に笹を立て注連縄を張り御幣を立てた中に直径約30mの釜三つが据えられ薪で湯が沸かされる。湧き上がるとまず巫女が神楽を舞い、次いで三つの釜それぞれに御神酒・塩・洗米を入れる。一番初めの湯は「献茶」と言って巫女が柄杓で器に汲み、三方に乗せて神様にささげる。献茶が終わると、参拝の人々は釜の周囲に集まる。笛と太鼓に合わせて巫女が両手に持った笹束で湯を玉の滴にして振りまく。この湯に当たると災難を逃れることができるという事で、みな、頭を垂れて熱さをものともせず湯を受ける。湯が釜の半分くらいの量になると、人々は巫女が湯をまくのに使った笹をもらおうと殺到する。この笹を持ち帰り、神棚や玄関に刺しておくという。そうすると、一年間の悪事災難を逃れることができるという。 子供集団と大人組の対抗で行われる。前者が南、後者が北に陣取り、その位置を変えることなく度引き合う。子供組には小学1、2年生の母親や祖父母、大人組には壮年と壮年の男性たちの加勢が許される。まずはじめ石場つき歌に合わせ、「エイトー、エイトー」の掛け声をかけながら、しゃがんだままで綱を持ち上げては地面に打ち付ける。歌が七節で終わるのを合図に引き始める。勝負は七番行うが、一回引くごとに休み、歌を七節ずつ歌ってはまた引く。七回目を「納めの綱」といい、「最後の綱は必ず大人組に勝たせない」と、その年は豊作でない」と言つて、昔からわざと勝つようにさせている。 当日朝、艇長らは天白神社にお参りして御幣を受け取り、それをペーロン船に取り付ける。注連縄には御神酒をかける。この御幣はレース終了後、見物客が争うようにして千切り、家に持って帰って神棚に祭つたと言う。（中略）コースは皆勤橋より竹島まで600m、乗り手は艇長・銅鑼・舵取り・太鼓各一人と漕ぎ手28人の総勢32人である。竜の首まで入れて、船の長さは13mである。皆勤橋がなかった時代の予選は本部から竹島前の棹までの千五百mであった。乗り手も40人と多く、船の長さも13・5mであった。天白神社の名をとって、天龍・白龍・神龍と名づけられた船に3チームが3回とも別の船に乗るようにして抽選した。これに優勝することが最高の名誉だったと当時の乗り手は自慢する。		

38		37
広島県		島根県
廿日市 宮島町		八束郡 美保関町
厳島神社		美保神社
厳島の 延年		諸手舟 神事
7月14日		12月3日 (例祭)
夜		正午
木偶を 奪い合 う		マツカ を先に 納めら れるか
幸福		豊漁
東西の 町の青 年		氏子、 男性
天孫降臨の砌、天津神の使いが出雲の国の大国主神に「この国を天津神の神子に奉れ」と伝えた。大国主神は、美保の岬で釣りをする事代主神の元へ早舟の使いを出し判断を求めた所、「この国は天津神に奉りたまえ」と事代主神が答え、大国主神は出雲の国を天孫に譲る事を決断された。この記紀に伝えられる国譲りの、事代主神の元へ早舟が使いに行く件が「諸手船神事」として継承、再現されている。十二月三日、新嘗祭を終えた正午、客人社で例祭を行う。式は開扉に始まり、奉幣、献饌、巫女舞、拝礼、撒饌、閉扉と続いた後、本社に戻り、直会が行われる。定刻(午後二時ごろ)、宮司・神職、氏子の頭人他一同が昇殿し、開扉、奉幣の後、神楽を奉納する。次いで、宮司が御籤の座に着き、諸手船二艘に分乗するマツカ持ち(諸手船の舳先に立てる三又の木鉾を持つ役)、大脇(舵取りの補佐)、大櫓(舵取り)、カコ(漕ぎ手)などを選ぶ。乗組員を乗せた諸手船は、本社下の宮灘を出て、対岸の客人社のふもとまで漕ぎ進み、客人社を遙拝して、宮灘に漕ぎ戻す事を三度、互いに速さを競う。また船が接近すると、カコたちは海水を掛け合う。途中、マツカ持ちは上陸して、先を争って随神門にマツカをささげる。最後に、大櫓を乗る神、宮司を事代主神に擬した応答祝言が交わされ、互いに再拝、合わせ拍手が行われる。さらに、船は交差して港内を円を描いて回り、再度三度の競漕をした後上陸、宮司と共に乗組員は昇殿して撒饌頒賜の儀を受け、神事会所では真魚箸式(古式の直会)が行われ、祭りは終了する。三度目に戻ってきた時の競漕で勝つことと、マツカを先に奉げる事で豊漁になると言われているが、特にマツカを奉げる事が重要視されている。 厳島の延年祭は、七月十四日の夜に行はれる。供僧伶人悉く出仕して、大宮三棟の拝殿を用ゐ、五尺四方の台を備へ、之を地盤と称す。此の地盤の上四隅に、松梅桜の造花の枝を立て、四手を切かけ、中央に三尺余りの木偶(ひとかた)を装束美々しく飾り置く。木偶は多くは福神の形とし年毎に新しく作り変へる。かくて盤上に灯を挑げて(ママ)、拝殿の上に高く吊り上げる。用意整いて日没に至れば、合図の鐘が鳴る。すると東西の両町より裸形の男子が、西は筋交橋観音堂の辺、東は坂本山王の拝殿に勢揃して、関の声三度揚げ、我先にと拝殿目がけて押かける。かかる程に裸形の男達は、吊り下げた地盤の下に群り立ち、足を爪立てて盤の		

41	40	39	
愛媛県	香川県	山口県	
宇和島市	善通寺市	柳井市	
和霊神社	善通寺		
和霊さま	会陽	阿月の神明祭	
7月23日・24日	2月第4土日	小正月（現在は2月11日）	
	夜7時代	全日	
櫛を奪い合う	幸運の宝木を奪い合う	飾り物や神幣を奪い合う	
	福男に選ば		
若衆	裸男	地域の人々	
中を窺ふ。何分大勢なれば、揉み合い押し合うて呻く声は轟々として物凄く殿閣楼台の間に響き渡る。かくて地盤を下すと共に、大群衆は一度にかかって木偶を争ひ双方声かけて奪い合ふ。即ち御首を取るを勝ちと定める。併し折角取り得た者があつても裸体なれば隠すに隠されず、彼方へ渡し此方へ奪われ、上になり下になり東西互いに秘術を尽くし、或ひは抱いて池の潮に漂ふも有り、または楼台の上に持ち逃げるもあり、兎角して東西何れかに定まれば、東は金鳥居、西は筋交橋にて大音声に「御首を取ったぞ」と名乗り上げる。かく烈しく争ふので、折角美しかった木偶の首も、彩色剥落して見る影も無いが、此の首を取った者はその年幸福があり、事に之を得た者は一家に幸福があるといひ、一生懸命に争奪するといふ。 祭りの朝、横幣に飾りが取り付けられさらに一段高く真幣が結ばれると、身を清めた白鉢巻、シヤツ、白足袋の若者達が長持ジョウゲを担いで通りを練り歩き、それが宮に戻るとホラ貝を合図に勇壮な「起し立て」が始まる。かつては東西で御神体の起し立ての早さを競い合つたという。氏子を中心に準備や仕度が整えられて、人々は仮設の神明社にお参りする。神明踊りは幼稚園・小・中・高生、未婚の若者、中老たちが大円陣を作つて踊る。若者は忠臣蔵の赤穂浪士や、柳生但馬守と十兵衛などに扮して音頭と太鼓に合わせ踊る。女の人は花笠を被つて踊る。子供たちも中央で「ぼんでん」を持つて踊る。夜になると「ご神体をハヤス」などといつて神火が放たれ、ご神体が火柱を上げて浜側に倒される。炎と熱気の中、芯木の松が抜きとられ、人々は飾り物や神幣を取り合う。また焼いた灰を持ち帰り田畑にまく。 夜の7時台に、弘法大師の威徳を偲ぶ法要が御影堂で行われる。そのあと、宝木を捧持した管長、山伏や信者が五重塔まで練り歩く。ここで雌雄二本の宝木を管長が投げると、裸祭りの本番となる。千五百人あまりの裸男達が歓声をあげ、幸運の宝木を目指して激しくぶつかり合い、勇壮な争奪戦を繰り広げる。宝木を取つたものは、福男となる。 祭りには、十数体の牛鬼が竹ボラの音と共に町を練りまわる。商家の前では長い首を低くして威勢よく突つ込み、悪魔祓いをする。最上の下流で船を捨てた神輿が、川の中央に立てられた大竹笹を三度廻ると、若衆が先を争つてこれによじ登り、先端に取り付け			

46	福岡県	福岡市	宮崎宮	りせり (玉祭)	正月3日	午後0時	玉を取り合う	豊穣、漁業の優先権	競子である青年	提灯、のぼり、大漁旗で飾り立てた小船（伝馬船）に、祭り衣装、鉢巻を締めた少年が乗り込み、鉦太鼓の勇壮なリズムと漕ぎ手の漕子にあわせて櫂と梵天を振りたてて舞う海上巡幸儀礼である。また競漕儀礼として櫂伝馬もある。氏子中の若者による船漕ぎ競争で、勝負によって神意を伺う年占の意味が込められている。共に、あわや転覆かと思わせるほど船体を大揺れさせながら演じられる。船を揺さぶるのは、海の力を呼び招く意だとされている。
45	徳島県	海部郡海南町	大里八幡神社	秋祭り	10月第3日曜	午後2時から	矢や的を奪う	縁起物	海部側の流域の人々	若者
44	徳島県		鎮守の神様	初詣	元旦の朝	朝	一番詣でを競う		地域の人人々	氏子の若者
43	高知県	土佐郡土佐山村高川	仁井田神社	早飯食	11月8日		早くご飯を食べる	御利益がある	氏子	早飯食の神事は神社で行われる。氏子が拝殿に着座すると、座直りの杯が一巡する。次に山盛りの椀飯に焼き味噌を添えた膳が各人に出される。「どうぞ、頂いてください」の合図で食べ始めるが、早飯食いの名の通り、早く食べることがしきたりである。おかわりの許されるので、メシメシ、味噌々々と催促する声もあちこちから聞こえる。食べ終わると、大声で膳を下げるように命じる。やがて大盃が巡って来て終わる。山盛りのご飯を早く食べるほど御利益があるといわれている。
42	愛媛県	北条市鹿島	鹿島神社	カイネ	4月10日、5月12日		競漕	神意を伺う	氏子の若者	提灯、のぼり、大漁旗で飾り立てた小船（伝馬船）に、祭り衣装、鉢巻を締めた少年が乗り込み、鉦太鼓の勇壮なリズムと漕ぎ手の漕子にあわせて櫂と梵天を振りたてて舞う海上巡幸儀礼である。また競漕儀礼として櫂伝馬もある。氏子中の若者による船漕ぎ競争で、勝負によって神意を伺う年占の意味が込められている。共に、あわや転覆かと思わせるほど船体を大揺れさせながら演じられる。船を揺さぶるのは、海の力を呼び招く意だとされている。

	47	
	大分県	
	宇佐市	
	宇佐八幡宮	
	夏越祭	
	新暦7月31日	
	お旅所 に一番 に到着 する	
	大豊作、破 片を手に入 ると病氣 または魔除 けになる	
	担ぎ手 と見物 者	
と言え、この2つの玉をオミキをそそいで清め、次には湯でよく洗い、藁を束にしたが如き形のものでみがき、更にこれに油を塗りて白紙を拭い、この油でにじんだ紙はしばらくを治すとして貰い手が多いので授与するのにも滑稽であった。是で此2つの玉は更にここから一町余り離れた玉取恵比寿堂に移されたのであるがここでは今日の競子である青年がふんどし1つの裸で多数待っている、神人はその男玉をさつと群衆に投げてしまう。女玉は貝桶に納めてしまうので奪い合いするのは男玉の方だけである。そうするとワツと歓声を上げて大勢はこれに飛び掛るが、なにさ一尺ばかりの木製の玉、しかも油が是に塗られているので奪いつ奪われつつ手から手へと進展して取り留めるものはない。むかしからこの玉を奉げたほうの部落がその年豊穡でめぐまるとか、漁業の優先権を得たと言われている。		
宇佐八幡の夏越祭は喧嘩祭とも呼ばれていてずいぶん荒っぽいものである。喧嘩祭と呼ばれるのは、新七月三十一日渡御の時、三殿のみこしが正門を出るまでは一ノ殿、二ノ殿、三ノ殿の順序で繰り出されるが、この門をくぐると三殿のかつぎ手は死に物狂いにお旅所へと先登を争って、また是を見物する者も己が部落から出ている神輿に応援して他村の担ぐ方へ石の雨を降らして妨害を加えるなど、修羅の巷のような怒号力戦、時には大喧嘩ともなることはほとんど昔からの例となっているからである。そして、このように本殿からお旅所までわずかに四、五町足らずの短距離なれどその間を悪戦苦闘しつつ先着を争う理由はなんなのであるかという、勝てばその所属する村が大豊作じゃという俗信があるに過ぎないのである。しかし、活劇はそれで仕舞いとなったのではなく、神輿がお旅所へ着かれてから更にまたはじまるのである。それは、お旅所では神職が輿丁の労を労う意味で、一殿につき五升樽の酒一丁を振舞う事になっているのであるが何様頭数は多し酒は一樽と来ているので、血気盛りの若衆がどうして我慢できよう、これが投げらると我先に奪わんと酒樽に殺到する光景は、さながら悪鬼夜叉の如く、瞬く間に樽は寸断に砕けて、酒を口にすするしないの段ではなく、てつとりばやく手拭に酒をしましてその雫を啜る事さえも出来たら大成功の方で、普通はその酒が飲めると言うことよりも、此寸断された樽の破片を手にし得れば満足としているのである。これは、この破片を頂くと病氣または魔除		

53	52	51	50	49	48
熊本県	熊本県	熊本県	熊本県	宮崎県	大分県
玉名郡 長洲町	熊本市 城山上 代町	上益城 郡甲佐 町浅井	人吉市 中神地 区と大 柿地区	宮崎市 瓜生野	南海部 郡弥生 町江良
四王子神 社	高橋稲荷 神社				八坂神社
的ばか い	（福餅 まき）	十五夜	綱引	綱引 十五夜	疫神祭
1月15日	2月始 めの午 の日	8月15日	8月15 夜	9月15 日	正月29 日
昼か	午前10 時から 1時間 き	夜中	夜中		
的を奪 う	福餅を 得る	綱引を する	綱引を する	綱引を する	笹を奪 い合う
	一年の福が 得られる	稲、麦がよ くなる	病気になる ない、柿が 良くなる	豊作、ある いは商売繁 盛	安全祈願
成人以 上の男 性	参詣者	部落の 人々	部落の 人々	部落の 人々	参詣者
けとなると言う俗信があるからである 正月二十九日に、南海部郡弥生町江良の八坂神社で疫神祭がある。立春の日に作っておいた疫神像の前で湯建て神楽を奉納する。神楽が終わると参拝者が舞人の持つてゐる笹を奪い合う。牛馬に与えて安全を祈るためである。世話人が塚に火をかけ、封じ込めた疫神を焼き送る。 戦前までは十五夜綱引をしていた。綱引は子供たちを中心として部落の人々も多く出てきて引くものだった。引き合いは在側と町側とに分かれて行うのが普通で、在の側が勝つと豊作、負けると不作になるといい、町の側が勝つと商売繁盛だという。綱が切れてしまうまで、何回でも引いた。 子供たちがワラを集め、西南が大綱にする。綱は丸く巻いて積み上げ、その上に子供組から青年組に入ったばかりの十五歳の者を上らせて月を拝ませる。それから綱を左右に引いて輪を崩し、十五歳のものを崩れ落ちさせる。十五夜の綱を引けば病氣しないと言つて、部落の人はみな出て綱引をする。綱引きが終わった後、子供や青年が角力をとる。綱引の綱は切つてもらつて帰り、屋敷の柿の木の下に巻いておくとし落ちがしなくてよくなるという。 十五夜の晩に綱引をする風習は県下全般にあるが、上益城郡甲佐町浅井部落のように、上組が勝てば稲作がよく、下組が勝てば麦作がよいと秋の収穫を占う場合もある。 この神社は農家の人の信仰を得て奉納される米は福俵として飾られる。米は神の供物として初午の一週間前まで受け付けられる。特に商売繁盛を祈る自営業の信仰があつく、商売の一年を初午から初午までと考える人もいる。祭りの最大の呼び物は福餅まきである。元は参拝者に手渡されていたが、参拝者が多くなつてまきはじめてのものである。午前十時から一時間ごとに七回、1回に約1万個の餅が撒かれる。最初の餅まきは神職を始め氏子総代に混じつてその年の吹く男・福女に選ばれた者も、高い神殿舞台を上から餅を撒く。境内に詰め掛けた人たちが、この一年の福を授かうと餅が撒かれるたびに歓声と共に大きな波のように揺れ動く。 四王子神社は永祿元年に筑前の四王子嶽より神を迎えたと伝える。迎えた場所は長洲町の州（須）崎の浜の岩屋で、その時、鉞之進という者が鉞で土を盛り固め、注連之進というものが注連縄を張り、藁で円座を作つて祀つたという。そして、現在地に神を遷す					

55	54	
鹿 児 島 県	鹿 児 島 県	
川 辺 郡 川 辺 町 高 田 、 城 下	川 辺 郡 大 浦 町 泉	
十五 夜	綱 引	
9月 10日 から 15日	9月 10日 から 15日	
	夜 中	
綱 引 を す る	綱 引 を す る	
女 性 は 髪 が 美 し く な る	豊 年 に な る	
部 落 の 人 々	部 落 の 人 々、 特 に 子 供 と 青 年	
ときに村人達が円座を奪い合ってお守りにしたのが的ばかいの起 こりとしている。的は前日の十四日、上磯地区の人々が有明海で 禊をして作る。十五日の朝、この的はまず州崎神社に「的おさめ」 の神事として奉納される。そして、四王子神社に運ばれる。神社 では昼近くから破魔弓祭としての神事があり、神主が的をめがけ て三本の矢を射る儀礼が行われる。神事が終わる頃の境内には、 この日に成人式を迎えた者を含めて大勢の若者が集まってくる。 そして、的が渡るのを今か今かと待っている間に、締め込み姿の 集団にはだんだん気迫がこもって来る。的が渡されると的を抱え た者に皆が「ワッショイ、ワッショイ」と殺到し、もみ合ったり 重なったりして裸の波が揺れ動く。境内での的ばかいが続いた後 に、もみ合う一団は3メートルほど離れた有明海に繰り出して海 の中でも奪い合いがある。その頃に浜ともばらばらに壊されて、 若者達の手には的の藁が握られている。そして、その藁は小さく 切り分けられ、氏子の人たちにも分け与えられる。貰った人は藁 を神棚などに供えて、その年がよい年であるよう祈念する。 十日に子供たち（コニセと言って10歳から14歳までの男の子）と 青年たち（オーニセと言って15歳から30歳までの男子）が集まっ て、夕方から小綱を練る。出来上がると、その小綱で十日の夜に 儀礼的に子供対青年で引き合う。次に十三日には大綱を練る。一 方にだんだん太くなっていて、端では50センチを超える太さに作 る。先の小綱を細い方につないで、十五夜の月が出るとそれを伸ばして引 く。子供たちは小綱のほうを、青年達は大綱のほうを引く。子供 と青年の対抗だが、部落の人々は見物に来て、子供が負けそうに なると子供側について引く。子供の方が勝つと年がよい（豊年 に な る）と言って喜ぶ。 綱はカンネンカズラを芯にカヤ、ワラをないつけて直径40cm、長 さ30mほどで、青年が加勢して作る。綱の頭に当たるところはウ サツゴロンクチ（兎の口）といって、十五歳の頭の人数だけの輪 を作り、頭はその兎の口を取って引く。綱の尾に当たるほうは細 くなっていて、こちらをオナゴングチ（女の口）と言うのは、女 が引く方だからである。（中略）綱は兎の口側を男の子供を中心に 男達が引き、女の口側を女達が引く。女は髪の毛を綱につけて引 くと髪が長く美しくなると伝えている。		

59	58	57	56
沖縄県	沖縄県	沖縄県	沖縄県
石垣市	宜野湾市	糸満市	糸満市
石垣四箇			港
アヒャー ー ジナ	綱引	綱引き	ハーレー ー 行事
6月の吉日	6月15日 前後・土曜日	8月16日	旧暦5月4日
綱引をする	綱引をする	綱引をする	一番早くに参詣する
豊穣	豊作祈願	豊かな幸	祝福と豊穣
女性		村の人々	
旧五月四日のハーレー行事は、イトマン漁港内で行われるハーレー競漕と、豊漁を含む豊穣（沖縄の言葉でユガフーという）を祈願する祈願儀礼の二つの要素が絡み合いながら進められる。華やかな競いの面と、静かな祈りの面が渾然一体となっているところに糸満ハーレーの民俗的意義がある。競漕は、次の基本的な三つを中心に展開される。（一）御願（ウガン）ハーレー・糸満の氏神の聖地白銀堂への祈願を競うもので、北、中、南の区域を代表する三つのハーレーが競漕し、その着順に、糸満ノロが待つ白銀堂の神前に参詣し、神々の祝福を受ける。（二）クヌスカセー（転覆競漕）…レースの半ばでいっせいに爬龍船を転覆させ漕ぎ手は泳ぎながら船を元通りに復元させ、再び乗り込んでレースを続ける。糸満独自の競技であり、他に類例を見ない。（三）アガイバーレー…本来的に遠い沖合いから、人々の待ち受ける岸を目指して漕ぎ寄せてくる競漕であり、海のかなたの神の在所「ニライ・カナイ」から豊穣を呼び寄せる意味を持つものである。故に、このハーレー行事祭司の中心をなす競争であり、この競技に勝った組、区域が先に神々の祝福と豊穣を受けるということで、漕ぎ手も応援する人々も最大の力をこの競漕に集中した。現在は沖から漕ぎ寄せる形はなくなり、港内を二、三周するレースになっているが、もともと大切なレースであることに変わりはない。 糸満市真栄里では八月十六日に綱を引くが、かつては六月二十五日にニ才綱と称して引いた伝承が残っている。真宮里における綱引の原理は、東のニライカナイから来訪神（東側のシタクであるミルクー幸いをもたらす神）によって象徴される」と幸と豊穣を西の現世に引つ張り込むための儀礼である。真栄里では東が雄綱、西が雌綱であり、西が勝つことによって豊かな幸がもたらされると考えられているのである。 南のメンダカリと北のシンダカリに別れ、各々が性器をかたどった綱を作る。御獄での祈祷の後、棒を差し込んで雌雄を合体させて綱を引く。豊作祈願とお払いが目的だと言う。 六月の吉日に収穫を感謝し豊作を祈願する豊年祭のブーリが行われ、綱引も組み込まれる。東西に綱が引かれ、女性だけの綱引アヒャージナが行われる。西の勝ちが願われるが、これは世曳き、つまり東方の理想世界から豊穣を島にもたらすユークイ（世曳い）			

【参考文献】

	県名	地名	実施場所	行事名	参考文献
1	青森県	南津軽郡尾上町	猿賀神社	柳の神事	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 青森県』（桜風車、平成五年七月）
2	秋田県	平鹿郡大森町八沢木地区	保呂羽山波宇志別神社	御戸開神事	「雪の出羽道」（『菅江真澄全集 第六巻』未来社、一九七六年十月）
3	岩手県	岩手郡岩手町川口村大金沢地区	サヤド	ウブスナ様の祭日	国学院大学民俗学研究会『昭和三二年度 民俗探訪』（『年刊 民俗探訪2 自昭和三一・至昭和三五年度』所収、臨川書店、昭和四九年六月）
4	岩手県	東磐井郡千厩村	愛宕神社	御鳩取り	
5	栃木県	足利市大岩町264番地	最勝寺	悪口祭	中山太郎「悪口祭」（『民俗芸術』一三、国書刊行会、一九七二年十二月）
6	栃木県	西茨城郡岩間町泉	愛宕神社	（悪たい町） 悪態祭	「大岩山毘沙門天の由来」（平成一四年に最勝寺発行のパンフレット）
7	茨城県	相模原市田名	田名八幡宮	田名八幡宮的祭	島田栄「愛宕神社の悪態祭」（『史料いわま』第10号岩間町公民館、一九八二年四月）
8	神奈川県	小田原市小船	白鬚神社	白鬚神社奉射祭	神奈川県祭礼研究会編『祭礼事典・神奈川編』（桜楓社、平成四年四月）
9	神奈川県	豊川市豊川町1番地	豊川稲荷（妙厳寺）	喧嘩参籠	神奈川県祭礼研究会編『祭礼事典・神奈川編』（桜楓社、平成四年四月）
10	愛知県	北設楽郡東栄町	御園地区、足込地区	花祭り	『日本まつりと年中行事辞典』（桜楓社、一九八三年十月）
11	愛知県	稲沢市	尾張大国霊神社（国府宮）	難負神事	川合清子「花祭りを伝える人びと——東栄町「御園」と「足込」を中心に——」（『比較日本文化研究6』待兼山比較日本文化研究会、二〇〇〇年十二月）
12	愛知県	岐阜市	美江寺	美江寺祭り	田中久夫「裸祭り」（『仏教行事歳時記 3月彼岸』、第一法規出版、一九八九年二月）
13	岐阜県	岐阜市	美江寺	蚕祭	柳田國男『分類祭祀習俗語彙』（角川書店、一九六四年十一月）
14	岐阜県	岐阜市	美江寺	美江寺祭り	柳田國男『分類祭祀習俗語彙』（角川書店、一九六四年十一月）
15	岐阜県	武儀郡倉地村（現・関市）	白山神社	喧嘩祭	柳田國男『分類祭祀習俗語彙』（角川書店、一九六四年十一月）
16	滋賀県	大津市真野町	神田神社	神田神社稚児祭	滋賀県祭礼研究会編『祭礼事典・滋賀県』（桜楓社、平成三年十月）
17	滋賀県	志賀町八屋戸	八所神社	八所神社安産大祭	滋賀県祭礼研究会編『祭礼事典・滋賀県』（桜楓社、平成三年十月）
18	滋賀県	蒲生郡日野町中山	野上山	芋比べ祭り	滋賀県祭礼研究会編『祭礼事典・滋賀県』（桜楓社、平成三年十月）

であると考え、女性の力で世を引き寄せる事を願い、勝敗は最初から決まっている。

19	新潟県	南魚沼郡大和町浦佐	毘沙門堂	毘沙門堂の祭り	田中久夫「裸祭り」(『仏教行事歳時記 3月彼岸』、第一法規出版、一九八九年二月)
20	福井県	三方郡三方町旧西田村神子	臥竜院	ハタトリ	国学院大学民俗学研究会『昭和三三年度 民俗探訪』(『年刊 民俗探訪2 自昭和三一・至昭和三五年度』所収、臨川書店、昭和四九年六月)
21	福井県	三方郡三方町旧西田村の田井野	由比神社	初詣?	国学院大学民俗学研究会『昭和三三年度 民俗探訪』(『年刊 民俗探訪2 自昭和三一・至昭和三九年度』所収、臨川書店、昭和四九年六月)
22	石川県	加賀市山代温泉郷	薬王院温泉寺	菖蒲湯祭り	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 石川県』(桜楓社、平成四年七月)
23	奈良県	桜井市高田	飯宮	あはれ亥の子	奈良県祭礼研究会編『祭礼事典・奈良県』(桜楓社、平成四年六月)
24	奈良県	桜井市三輪	恵比寿神社	初えびすの「くまき」	奈良県祭礼研究会編『祭礼事典・奈良県』(桜楓社、平成四年六月)
25	奈良県	御所市古瀬	川合八幡神社	引合餅行事	奈良県祭礼研究会編『祭礼事典・奈良県』(桜楓社、平成四年六月)
26	和歌山県	有田郡	八坂神社	笛踊り	柳田國男『分類祭祀習俗語彙』(角川書店、一九六四年十一月)
27	京都府	京都市東山区祇園町北側625番地	野崎観音(慈眼寺)	おけら参り	「拾遺都名所図会 卷之二」(『新修京都叢書第7巻』、臨川書店、昭和四二年十二月)
28	京都府	大東市野崎	野崎観音(慈眼寺)	野崎参り	井原西鶴「世間胸算用」(『決定版 井原西鶴全集13』明治書院、一九七五年六月)
29	大阪府	大東市野崎	野崎観音(慈眼寺)	野崎参り	「河内名所図会 卷之六」(『版本地誌大系4』、臨川書店、平成七年七月)
30	大阪府	池田市伏尾	細川神社	野崎参り	落語「野崎参り」(榎本滋民・三田純市編『スーパール文庫 落語名人大全』所収、講談社、一九九五年一月)
31	大阪府	池田市伏尾	細川神社	秋祭り	『日本民俗学実習調査報告書6 大阪府池田市伏尾の民俗』(神戸女子大学文学部史学科、二〇〇四年三月)
32	兵庫県	西宮市社家町	西宮神社	十日えびす	吉井貞俊『えびす信仰とその風土』(国書刊行会、平成元年十一月)
33	兵庫県	洲本市由良	由良湊神社	ねり子祭り	『ふるさと兵庫暮らしの四季彩』(旺文社、一九九七年十一月)
34	兵庫県	明石氏大蔵天神町	休天神社	湯立て	『ふるさと兵庫暮らしの四季彩』(旺文社、一九九七年十一月)
35	兵庫県	美方郡浜坂町久谷	ナカミチと呼ばれる久谷川と瀬間谷川に挟まれた公道	菖蒲の綱引き	『ふるさと兵庫暮らしの四季彩』(旺文社、一九九七年十一月)
36	兵庫県	相生市	相生湾	ペーロン祭	『ふるさと兵庫暮らしの四季彩』(旺文社、一九九七年十一月)
37	兵庫県	八束郡美保関町	美保神社	諸手舟神事	『週刊朝日百科日本の祭り 20』(朝日新聞社、二〇〇四年十月刊)、美保神社発行の行事由来、二〇〇五年八月九日の調査
38	広島県	廿日市市宮島町	厳島神社	厳島の延年	『説話』大百科事典 大語園(名著普及会、昭和五三年六月)
39	山口県	柳井市阿月	善通寺	阿月の神明祭	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 山口県』(桜楓社、平成七年八月)
40	香川県	善通寺市	善通寺	会陽	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 香川県』(桜楓社、平成四年五月)
41	愛媛県	宇和島市和霊町	和霊神社	和霊さま	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 愛媛県』(桜楓社、平成七年六月)
42	愛媛県	北条市鹿島	鹿島神社	カイネリ	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 愛媛県』(桜楓社、平成七年六月)

43	高知県	土佐郡土佐山村高川	仁井田神社	早飯食い	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 高知県』（桜楓社、平成七年十月）
44	徳島県		鎮守の神様	初詣	金沢治『日本の民俗36 徳島』（第一法規出版、昭和四十七年六月）
45	徳島県	海部郡海南町	大里八幡神社	秋祭り	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 徳島県』（桜楓社、平成一〇年九月）
46	福岡県	福岡市	管崎宮	玉取祭り（玉せり）	宮武省三『九州路の祭儀と民俗』（三元社、昭和一八年三月）
47	大分県	宇佐市	宇佐八幡宮	夏越祭	宮武省三『九州路の祭儀と民俗』（三元社、昭和一八年三月）
48	大分県	南海部郡弥生町江良	八坂神社	疫神祭	染矢多喜男『日本の民俗44 大分』（第一法規出版、昭和四八年四月）
49	宮崎県	宮崎市瓜生野		十五夜綱引	小野重朗『十五夜綱引の研究』（慶友社、昭和四七年九月）
50	熊本県	人吉市中神地区と大柿地区		綱引	小野重朗『十五夜綱引の研究』（慶友社、昭和四七年九月）
51	熊本県	上益城郡甲佐町浅井		十五夜	牛島盛光『日本の民俗43 熊本』（第一法規出版、昭和四八年五月）
52	熊本県	熊本市城山上代町	高橋稻荷神社	初午（福餅まき）	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 熊本県』（桜楓社、平成九年四月）
53	熊本県	玉名郡長洲町	四王子神社	的ばかい	高橋秀雄・西田茂雄編『祭礼行事 熊本県』（桜楓社、平成九年四月）
54	鹿児島県	川辺郡大浦町泉		綱引	小野重朗『十五夜綱引の研究』（慶友社、昭和四七年九月）
55	鹿児島県	川辺郡川辺町高田、城下		十五夜	小野重朗『十五夜綱引の研究』（慶友社、昭和四七年九月）
56	沖縄県	糸満市	港	ハーレー行事	白鳥芳郎・秋山一編『沖縄船漕ぎ祭祀の民族学的研究』（勉正社、一九九五年二月）
57	沖縄県	糸満市真栄里		綱引き	沖縄県教育委員会『沖縄県史23 民俗2』（国書刊行会、一九八九年十月）
58	沖縄県	宜野湾市大山		綱引	『日本民俗大辞典 下』（吉川弘文館、二〇〇〇年四月）
59	沖縄県	沖縄県石垣市	石垣四箇	アヒヤージナ	『日本民俗大辞典 下』（吉川弘文館、二〇〇〇年四月）

○田中久夫「祭日考―暗闇祭りの持つ意味―」（『年中行事と民間信仰』、弘文堂、昭和六〇年二月）
○松平斎光『祭』（一九九八年三月、平凡社東洋文庫）